

# 「誰かが俺を撃ちやがった！」

## フォークナーの『館』における不可視の主体

藤野 功一

### 序

南北戦争の再建期以降にはじまり、現在ではグローバルサウスに及ぶアメリカ経済の帝國的支配はいかにして批判的に捉えうるか。本論では、フォークナーの長編小説『館』が、南部再統合に始まり、現在まで拡大し続けるアメリカの資本主義的帝国主義と、それに伴い把握しにくく透明なファシズム的主体の分有が推し進められ、人間、動物、機械にまで浸透してゆく状況を批判しうる視座を提供していることを論じる。

### 第1章

Tucker-Abramson はその 2019 年の論文において、『館』の第 14 章の元となった短編「おとりの豚」を取り上げ、この短編には、アメリカのファシズム的な経済政策を批判的に捉える視座が読み取れることを論じた。すなわち、アメリカは南北戦争において奴隷制を維持しようとする南部を敗北させ、第二次世界大戦においてはナチスドイツを敗北させ、あたかも民主主義というアメリカンドリームを実現したかのように振る舞いながら、かえってファシズム的な資本主義的帝国主義を温存させ、経済成長による新たな植民地化を行う国家を実現してしまった。現在のトランプ政権の振る舞いは、その一つの帰結とさえ言える。

この観点をさらに発展させて、本論では、長編『館』に描かれている第二次世界大戦後のアメリカ片田舎の宅地用地分譲を、アメリカの資本主義的帝国主義の発展の長い歴史的過程の一環として捉えてみたい。すると、短編「おとりの豚」が『館』に組み入れられるに当たって行われた改編で、フォークナーがこの挿話をアメリカの経済主導による南部統合の過程の一環として歴史的に位置付けていることが明らかになるだろう。第二次世界大戦後、兵士たちがアメリカに帰還すると、白人の退役軍人には住宅ローンが優遇され、白人中産階級が戦後の国家体制を支持するサイレント・マジョリティーとなる。この現実の歴史に即して南部の第二次世界大戦後の状況をよりリアルに描き出すために、短編「おとりの豚」にはみられなかった「アメリカ政府による住宅融資(the Government Housing Loan)」(Mansion 628)という味気ない用語が長編『館』の第 14 章では導入され、南部の片田舎の町ジェファソンでも、政府の政策に伴う土地開発ブームに便乗して人々が金を儲けようと競いあい、政府の経済政策を捉えてうまく立ち振る舞った者と、そうできなかった者との間に経済的格差が広がり、さらに政府の経済的方針に従わない者に、ファシズム的脅迫がなされる様が描かれている。

### 第2章

『館』第 14 章では、アメリカの第二次世界大戦後、マイホーム所有という典型的なアメリカン・ドリームを叶えようと努力する若い男女マッキンリーとエッシー、そして自分の土地に固執してアメリカの経済発展に寄与しないエッシーの父親オーティス・メドウフィルの挿話が語られる。同時に、マイホームに憧れる若い夫婦さえも分有することになる、アメリカの経済方針に従わないものへの、「ファシズム的な脅迫(Fascist threat)」(Tucker-Abramson 210)が描かれ、その脅迫のエージェンシーは銃や豚にまでも浸透している様が描かれる。

巨大資本による土地開発に協力せず、土地を売ろうとしないメドウフィルは、娘のエッシーとその恋人の退役軍人マッキンリーからさえ早く亡くなることを願われ、隣接する土地に住むオレスティズ・スノープスの家からは毎日ように豚が自分の庭に迷い込んでくる嫌がらせを受ける。そんなある日、またも迷い込んできた豚を見かけたメドウフィルが窓を開けると、そこに 22 口径の弾丸が撃ち込まれる。「誰かが俺を撃ちやがった！」(Mansion 640)とメドウフィルは叫び、前々から気に入らなかった娘の恋人マッキンリーが自分を撃とうとしたと考える。だが事件の現場に現れた弁護士ギャビンは、犯人はマッキンリーではなく、それは豚がやったのだ、という。

だが実際には、メドウフィルが豚を見つけて窓を開けると、その窓に弾丸を撃ちこむように細工をした銃を、オレスティズが庭に仕掛けていたのだ。オレスティズは豚と拳銃と人間を巧みに組み合わせ、この事件にかかわる存在のいずれもが、その暴力的脅迫の働きを分有していながら、だれもその銃撃に直接関与しない装置を作り上げ、本来なら主体がないその装置が作動すると、あたかも主体のある誰かが弾を打ち込んだような効果を発揮するようにしたのである。銃を撃つ動機はマッキンリーとエッシー、引き金を引くきっかけは豚、そして引き金を引くのはメドウフィル、そしてオレスティズはただその仕組みを組み合わせたとすれば、弾丸を撃

った主体はそれぞれの役割に分散され、透明人間のように消え去ってしまう。しかし、そんな不可視の主体が何を解決するわけでもないため、ステューブズは、この仕組みを作ったオレスティズを半ば脅して、銃についた指紋から銃撃をしこんだ犯人として逮捕しない代わりに、土地をエッシーに譲るように提案する。おかげでエッシーはオレスティズとメドウフィルの両者の土地をあわせて売ることができた。こうして誰が弾丸を撃ったのか、という問いにたいする直接的な答えは宙吊りになったまま、ステューブズの知略により、国策に従い経済的繁栄を目指す退役軍人のマッキンリーとエッシーの白人の若い男女に有利な決着が導き出される。

この挿話では、アメリカ経済が、それに従わない者に対しファシズム的排除を行ういっぽう、それに無批判に従い、利益のためには人倫に反する行動を誰にも責められないように巧みに行うオレスティズ・スノープスのような者を大量に生み出すことが示される。これを指してギャビンが「どうしようもないよ、一人のスノープスを追い払ったと思ったら、もう一人のスノープスが出てくる。振り返る前にもう後ろに別のスノープスがいるって寸法さ」(Mansion 643)という。そして異質なものを脅迫し、排除してゆく透明なファシズム的主体は人間ばかりではなく機械や動物にも浸透し、人間、豚、拳銃にさえ分有されてゆくことが示される。

### 第3章

この透明なファシズム的主体の分有から逃れる道はあるのだろうか。『館』では、その可能性を示す存在として、主人公ミンク・スノープスが描かれる。ミンクは、スノープス一族の一人だが、孤児で、教養もなく、野良犬のように人の世話になってきた男である。若い頃にフレム・スノープスの言いなりとなり、フレムのライバルである人物を殺すが、その後の裁判でフレムがミンクを弁護しなかったため、長期間刑務所に入る。ミンクが入牢していた1908年から1946年は、第一次世界大戦から第二次世界大戦を含む時代であり、彼は兵役につくこともなく、退役軍人向けの優遇策を受けることもない。しかし、政府の経済政策に従って利益を得るという経験がないミンクは、その経済のファシズム的な傾向に染まることなく行動することが可能となる。

この小説のクライマックスで、ミンクはフレムの屋敷に忍び込み、フレムを銃撃して殺害する。動物の豚が自分への銃撃のきっかけとなることなど思いもよらないメドウフィルと同じように、フレムもまた野良犬のようなミンクが自分を銃撃することなど思いもしない。しかし亀のような形の安っぽいピストルを持ち、それを操ることに長けたミンクには、個別の存在の各要素を組み合わせることでフレムを殺す十分な能力が備わっている。

ミンクは動物のように単純で、入牢中はフレムに対する恨みを募らせ、出所して拳銃を手に入れると、その恨みに任せてフレムを殺す。だが、その復讐を果たしたのちは、そのファシズム的な歴史的諸条件の組み合わせを亀のような形をした銃とともに捨て去り、そこに浸透している歴史的呪縛から自由になる。復讐を終えた後のミンクを、フォークナーは、「彼は今や自由になったのだ(he is free now)」(Mansion 720)と描写する。その後力尽きたミンクは路上で死に、南部の土地に埋まっている複数の人々と一体化するが、墓標もないこれらの個体は、アメリカが主導しようとしている価値の一元化と統合とは別の価値観を生きたのであり、そのために墓標もなく、名もないままに埋もれている存在である。だがそうであるからこそアメリカの経済政策から自由であり、別の価値観を提示できる可能性を持つ存在ともいえるだろう。死んでこれらの存在と平等につながってゆくミンクを描写しながら、透明なファシスト的主体の分有が進む状況の中にあっても、フォークナーはもう一方で、それとは別の歴史的要素が作り出すことのできる、オルタナティブな個体の可能性を示している。

### 結論

『館』における第14章のエピソード、およびミンクによるフレムへの復讐劇は、どちらもアメリカの透明なファシズム的主体の分有が歴史的な構成物であることを示している。それが歴史的な構成物である以上、別の歴史的要素の組み合わせによるオルタナティブな個体とそのつながりを形成する可能性を示唆して、この小説は現在まで続くアメリカの植民的経済の体制を批判しうる視座を提供しているといえるだろう。

#### Works Cited

Faulkner, William. "Hog Pawn." 1954. *Uncollected Stories of William Faulkner*, edited by Joseph Blotner, Vintage, 1981, pp. 311-27.

---. *The Mansion*. 1959. *William Faulkner: Novels 1957-1962*, The Library of America, 1999, pp. 327-722.

Tucker-Abramson, Myka. "Answering the Call: Telephonic Fascism and Faulkner's Angel of History." *Faulkner and Money: Faulkner and Yoknapatawpha*, 2017, edited by Jay Watson and James G. Thomas Jr., UP of Mississippi, 2019, pp. 208-30.

\*本研究はJSPS 科研費 JP21K00357 の助成を受けたものである。